

【論文】

相互作用プロセスにおける社会的コミュニケーションの検討

—会話の意味と意図のズレに着目して—

伊藤 永乃 奥野 雅子(岩手大学)

I はじめに

社会的コミュニケーションは、日常の様々なシーンで繰り返され、人はそれぞれのコミュニケーションのパターンを用いて対処している。社会的コミュニケーションのあり方について研究されたポライトネスの理論では、一般的な社会において望ましいとされるコミュニケーションのパターンを理論化している。

一方、2013年に発表されたDSM-5において、知的な遅れを伴わない自閉症であるアスペルガー症候群やカナー型自閉症などの複数の自閉症の診断カテゴリーが、「自閉症スペクトラム」(以下、ASD)として統合され、その診断基準も改められた。ASDの診断基準の一つとしてあげられた「社会的コミュニケーション」の障害は、ASDの中核症状とされているが、それについて、熊谷(2017)は、社会性に障害があるというよりも社会性のレパトリーが多数派と異なっている可能性を示唆した。別府(2018)は、情動理解についてASD児者は定型発達者(以下、TD)と異なるユニークなスタイルをもつことを指摘し、千住(2018)は、対人コミュニケーションの困難を社会脳の非定型発達事例として捉え、認知的・神経科学的背景について、「能力」と「自発的運用」の対比をもとに考察を行っている。近年、これらの知見は、ASDの臨床像を独自の認知スタイルとして捉える、あるいは器質的な個人差と生育環境との相互作用の結果として捉える必要性を提言している。ASDの特性とされる「社会的コミュニケーションの障害」は、これまでASDの機能障害とされ、ASDからTDへ一方向的に捉えられてきた(綾屋,2011)。しかし「人間コミュニケーションの語用論」(Watzlawick, et al., 1967)では、コミュニケーションは一方ではなく双方向に行われる相互作用プロセスであるとされる。

これまで「情報理論」(Shanon & Weaver, 1949)においては、情報伝達を妨げるものがノイズとされてきた。しかし、Bateson(1979)は、ノイズを「新しいパターンが現れ出る唯一の源」としており、奥野(2013)も、ノイズをコミュニケーションにおける新たなパターンが出現する可能性とも示した。

そこで、本研究では、ASDへの新たな理解のために、コミュニケーションの相互作用の視点から、社会的コミュニケーションを会話の言葉の意味と意図のズレをノイズとして着目する。本研究では、ASDまたはTDに関わらず、人が日常生活場面で交わす会話は、どのように行われるのか、仮に社会的コミュニケーションにおける理想的な会話とされるパターンがあるとすれば、それぞれに、どの程度の誤差(ズレ)があるのかを明らかにする。人間関係維持のための言語的配慮とされるポライトネスの理論を参考に、日常のエピソードにおける、発話の言葉の意味と意図の分類と、そのズレ(ノイズ)の分類を通して、それら社会的コミュニケーションの多様性について語用論的観点から検討することを目的とする。

II ポライイトネスの理論とは

ポライイトネスを説明するものとして1983年、イギリスの言語学者リーチがグライスの「協調の原理」と共に機能するポライイトネスの理論(Politeness Principle) による「気配り」「寛大性」「是認」「謙遜」「合意」「共感」の6つのポライイトネス理論の公理を唱えた。これは費用対効果(cost/benefit) の概念に基づいて、会話において聞き手は最小のコスト最大のメリットを、話し手は最大のコストと最小のメリットが与えられることを基本とする、という捉え方をする(内海 2003)。また、Brown & Levinson(1987) は、ポライイトネスは、単なる言語の丁寧さや敬語を意味するのではないとして、実際の言語使用における機能を重視する「ポライイトネス理論」を提唱した。彼らは、従来の言語学者によって考えられてきた「丁寧さの原理」や、日本語における「敬語の研究」などとは違い、実際の「言語使用場面」における「対人関係調節機能」、すなわち、「そういう話し方をされて心地よいかどうか」という「実際の人の気持ち」を重視した概念として「ポライイトネス (politeness)」を捉え、「ポライイトネスの普遍理論」を提唱した。

「ポライイトネス」は、簡潔には、「人間関係を円滑にするための言語ストラテジー」と定義され(宇佐美,2008)、冗談や仲間うちの言葉の使用なども含めてより広く捉えられており、日本語で言う「丁寧さ」とも、英語の一般的意味での“politeness”とも同義ではない。

「ポライイトネス理論」(Brown & Levinson, 1987) は、「フェイス」という概念を鍵概念とし、すなわち、人間には、人と人とのかかわり合いに関する「基本的欲求」として、「ポジティブ・フェイス (positive face)」と「ネガティブ・フェイス (negative face)」という二種類のフェイスがあると捉える。ポジティブ・フェイスとは、他者に理解されたい、好かれたい、賞賛されたいという「プラス方向への欲求」であり、ネガティブ・フェイスは、賞賛されないまでも、少なくとも、他者に邪魔されたり、立ち入られたくないという「マイナス方向に関わる欲求」として捉えられている。ここでいう「ネガティブ」は、決して「否定的な」という意味ではなく欲求の方向として捉えておくのが妥当である。つまり他者に「近づきたい欲求」が、ポジティブ・フェイスで、他者と「距離を置きたい欲求、進入されたくない欲求」が、ネガティブ・フェイスである。Brown & Levinson(1987) は、この基本的欲求としての二つのフェイスを脅かさないように配慮することが、「ポライイトネス」であると捉え、会話の参加者がお互いのフェイス(自己決定・他者評価の欲求)を侵さないために行なう言語的配慮であるとした。また、ポライイトネスは、ポライイトネス規則という3つの規則で成り立っているとしている(表1参照)。

表1:ポライイトネス規則(Brown & Levinson, 1987)

お互いのフェイスを 侵さないために行なう言語的配慮	1. 押し付けない (距離:Distance)
	2. 選択肢を与える (敬意:Deference)
	3. 聞き手の気分を良くする (連帯:Camaraderie)

Ⅲ 方法

- 1) 調査協力者:16~47才 100名 (男性39名、女性61名)、平均年齢22.2歳、(SD=6.6)
- 2) 調査時期 :2018年1月~3月
- 3) 質問紙構成:PFスタディを参考に2コマ漫画を作成し、吹き出しに会話を記入してもらった。ポライトネスの理論(表2参照)を参考にした日常のコミュニケーションに関するエピソードをテーマにして、問題Ⅰ~Ⅹを作成し、各問題それぞれに、問①は発話、問②は発話の意図、問③は発話を受けた感想について自由記述で回答を依頼した。
- 4) 分析:KJ法を用いてカテゴリー分類を行った。

表2.:質問紙「コミュニケーション調査」の作成に参照したポライトネスの理論

問題Ⅰ	リーチのポライトネスの理論	テーマ:気配りの公理 「作業ノルマ」	相手の負担を最小限に、利益は最大限にする配慮
問題Ⅱ	ブラウンとレビンソンのポライトネス規則	テーマ:連帯 「年上の先輩」	聞き手の気分を良くする
問題Ⅲ	リーチのポライトネスの理論	テーマ:是認の公理 「テストの点数」	相手への非難を最小限に、賞賛を最大限にする配慮

Ⅳ. 結果と考察

各問題に対する問①「発話」と、問②「発話の意図」にズレのあるパターンが多くみられるパターンをKJ法によって分類した。本稿では問題Ⅰ、問題Ⅱ、問題Ⅲについて示した。

問題Ⅰは、図1に示したようにPFスタディを参考にして、ポライトネス理論の気配りをテーマとして作成した。問題Ⅰの問①に対する回答(Bさんの発話)についてカテゴリー分類を行った。その結果、5つのカテゴリーが得られた。これらを「体調への気遣いを中心とする:情緒的コミュニケーション」と、「ノルマを優先する:合理的コミュニケーション」の2つの大カテゴリーに分類し表3に示し、発話の意図の分類を表4に示した。発話と意図のズレを検出し、それらのパターンをノイズA、B、C、として表5に示した。

問題Ⅰのテーマ、ポライトネスの理論『気配り』の公理では、望ましいとされるコミュニケーションの在り方は、《相手の負担を最小限に、相手の利益は最大限に》である。表3に示す「ノルマ優先」を中心とする「合理的コミュニケーション」はその逆であると考えられるが、結果は100人中54パターンあった。これは決して多くの人が望ましいとされるコミュニケーションをとっているわけではないことを示している。ただし、この結果は発話のみで分類を行った場合であり、発話の意図や感想からは、言語だけでは判断できないものも多くあることが考えられる。たとえば、体調を気にかけているような「帰ってもいいよ」という言葉が作業効率を優先するための意図、「できるだけいいからやって」という言葉が、相手の仕事への意欲を尊重しようとする意図が含まれることも推察される。

【問題 I】 気配りの公理
 「作業ノルマ」—**教示**Aさんは、工場場で働いています。Bさんは作業の分担をみんなに指示しなければなりません。今日は、急ぎの納品があり、15箱の作業を5人で夕方までに仕上げなくてはなりません。この絵をみて、2コマ目でBさんが何と云うか、あなたがBさんだったら何と声をかけるでしょうか。問①：空白の吹き出しに、思い浮かぶ言葉を記入して下さい問②：問①のように答えたBさんの意図を教えてください問③：Bさんに声をかけられたAさんの気持ちを推測して下さい

問①空白の吹き出しに、思い浮かぶ言葉を記入して下さい
 問②問①のように答えたBさんの意図を教えてください
 問③2コマ目のAさんの気持ちはどのようなだと思いますか

図 1. 問題 I テーマ気配り：「作業ノルマ」

表3:問題 I 「気配り」:問①回答 Bさんの発話の 카테고리分類

カテゴリー		Bさんの言葉(回答1)バリエーション		回答数			
情緒的 コミュニケーション	親密性を示すコミュニケーション	体調への気遣い	・辛い時に働かせてしまって、申し訳ありません	44	26	1	
			・大丈夫?・無理しないで・帰っていいよ			25	
	信頼関係を築くコミュニケーション	代替案の提示	・残りは、仲間でフォローするよ		11	6	12
			・Bさんの分は、私が代わるよ				
合理的 コミュニケーション	本人の判断に任せる	・できるところまででいいですよ ・無理そうなら言ってね	18	11	11	12	
							・作業できそうですか? ・何箱ならできますか?
	指示的コミュニケーション	作業内容の見直しを検討	・無理しないでがんばって	54	21	9	12
			・3箱やってもらいたいが、できそうですか ・今日は帰りなさい・1箱だけやってください ・最低でも2箱はやって!				
指示的コミュニケーション	ノルマが最優先	・今日のノルマは一人三箱です	22	13	9	9	
		・状況説明(夕方までに急ぎの納品) ・無理してでも頑張ってもらおうよ ・急いでくれ!頼んだぞ					

表4:問題 I「気配り」:問②回答 Bさんの発話の意図のカテゴリー分類

	カテゴリー	意図(回答2)バリエーション	回答数	
体調への気遣い	心配する	・A さんがつらそうなので無理に働いて悪化して欲しくない	48	41
	助け合いを考える	・辛そうなので、自分が何とかしたい ・風邪は仕方ない、全体でフォローしあうべきだ		7
作業効率を検討	ポジティブな本人の気持ちを尊重	・風邪でも来たのは仕事のやる気と他の人への申しわけなさがある A さんに気を使わせないようにした。 ・無理しても出勤した B さんの仕事への意欲を尊重する	26	4
	体調と効率のバランス	・全体の効率を考えて ・途中で倒れられても困るか		18
	ネガティブ評価	・出勤できるということはある程度無事のはず、仮病かもしれない ・風邪の感染をおそれて帰宅させた		4
ノルマ達成を優先	ノルマ以外も気がかりではある	・他のメンバーの手前、ノルマを軽減するわけにはいかなかった。全員で早く終わらせる上ではそれがいいと思った。 ・ノルマは達成したいが、無理強いはできない	15	4
	ノルマは譲れない	・仕事であるからノルマは達成してもらわなければいけないから ・今日は忙しいし体調不良の人を休ませることはできない ・急ぎの仕事などの場合、責任者、上司は他人のことにあまり気を使っていられないから		11
無意図	気が付いてない	・B さんは A さんの体調に気が回らない ・気付いていないように思うから	11	

表5. コミュニケーションにおけるノイズのパターン A, B, C

	ノイズのパターン	ノイズの例
A	発話と意図のズレ:気遣いや遠回しな表現、相手との距離を置くための言い回し	B さん発話:「先輩って何歳でしたっけ、まだまだ大丈夫ですよ」 発話の意図:「先輩を気遣った方がいいと思った」 A さんの感想:「お前になにがわかる」
B	文脈読み違いや認知の歪みによる等	「仕事であれば、どんなに体調が悪くても他の人へ迷惑になるのでノルマは達成すべき」など
C	フェイス威嚇行為(相手を非難する発話)	直線的表現や相手を非難する発話はその人の積極的フェイスを傷つける。「馬鹿なんじゃないのかなあ」

問題Ⅱ：連帯「年上の先輩」

教示 Aさんは、Bさんの先輩です。Aさんは物忘れが多くなり気にしています。Bさんは心の中で「Aさん最近ミスも多いし、歳をとると私もそうなるのかな、Aさんって何歳だっけ？」とつぶやいています。この絵をみて、2コマ目でBさんが何と云うか、あなたがBさんだったら何と声をかけるでしょうか。

問①：空白の吹き出しに、思い浮かぶ言葉を記入して下さい

問②：問①のように答えたBさんの意図を教えてください

問③：2コマ目のAさんの気持ちはどのようなだと思いますか

図2. 問題Ⅱ：テーマ連帯「年上の先輩」

問題Ⅱは、図2に示したように、ポライトネス規則 (Brown & Levinson, 1987) の「連帯」をテーマとして作成したものである。問題Ⅱの問①に対する回答 (Bさんの発話) についてカテゴリー分類を行った。その結果、12のカテゴリーが得られた。これらを「相手の気分をよくするコミュニケーションを中心とする：連帯的コミュニケーション」と、「相手の気分を害する：非連帯的コミュニケーション」の2つの大カテゴリーに分類し、表6に示した。

問題Ⅱの問①回答：発話のカテゴリー分類では、望ましいとされる連帯的コミュニケーション、つまり聞き手の気分を良くする会話のパターンは、100人中42人が行っており、一方、56人が非連帯的コミュニケーションを行っていた。以上のことより、多くの人が望ましいとされる連帯的パターンの会話を行っているわけではないということが示されたといえる。

表6: 問題Ⅱ「連帯」: 問①回答 B さんの発話のカテゴリー分類

カテゴリー		バリエーション B さんの発話(回答1)		回答数			
連 帯 的 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン	敬意を 表すコ ミュニ ケーシ ョン	励ます	・そんなことないです A さんみたいに仕事できるようになりたいです ・いつも A さんに助けてもらってますよ。自分は経験が浅いので	42	8	4	
		自分事として考える	・私も最近物忘れが多いんですよ。きっと疲れているからだと思いますよ。休んでください。 ・いいえ。私も忘れることがありますよ。忘れそうな時はなるべくメモを取るようになっているんですよ。		6		
	共 感 示すコ ミュニ ケーシ ョン	先輩を立てる	・いやー私も物忘れが多くて嫌になっちゃいますよね ・でもまだまだわからないことがあるので、A さんのことを頼りにしてますよ。 ・いや私もしょっちゅうミスばかりです	34	29		
		援助する	・何か手伝えることがあったら言ってください。	3			
非 連 帯 的 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン	部分 的な 関心を 示すコ ミュニ ケーシ ョン	気休めをいう	・まだまだ、ピチピチですよ ・いえいえ A さんもまだまだ若いですよ。	56	29	12	
		質問する	・年取るとやっぱり他にも影響出てきますか？ ・例えば最近どんな物忘れをしたの？			3	
		具体的な提案	・自分も忘れること多いですし、A さんもまだまだ大丈夫ですって。気になるようなら専門医に聞いてみたらどうですか			5	
		一応の謙遜	・そんなことないですよ、ミスとか結構私もありますし ・若いうちにできる事は頑張ろうと思います			9	
	批判 的コミ ュニケ ーシ ョ ン	批判 的コミ ュニケ ーシ ョ ン	ふざける・ごまかす	・…エヘヘ・同じ歳じゃなかったんですか ・そんなことないですよ A さんの年齢忘れちゃいましたもん。二十歳ぐらいでしたっけ？	27	27	8
			歳を尋ねる	・A さん何歳だっけ？・あれ A さんって何歳でしたっけ？年齢重ねるとどうしても多くなりますよね			9
			間接的批判	・人間は皆同じですよ。・そんなことないよ、若いと言ってもいつか歳をとるから変わらないよ！・何をおっしゃっているんですか！いづれそうなりますって			6
			馬鹿にする	・A さんって見た目はおばさん。頭脳もおばさんですね。あ 言い過ぎました。ごめんなさい。 ・歳のせいだと思いますよ。・そりやあなたに比べれば			4

問題Ⅲは、ポライトネスの理論の是認の公理を参考に「テストの点数」をテーマに作成し図3に示した。問題Ⅲの問①に対する回答（B さんの発話）についてカテゴリー分類を行った結果、8つのカテゴリーが得られた。これらを「B さんへの賞賛を中心とする：肯定的コミュニケーション」と、「B さんへの非難を中心とする：否定的コミュニケーション」の2つの大カテゴリーに分類し、表7に示した。次に：回答②、B さんの発話の意図の分類を否定的意図、どちらでもない意図、肯定的意図、両方の意味を持つ意図の4つのパターンに分類した結果を表8に示した。



問①空白の吹き出しに、思い浮かぶ言葉を記入して下さい
 問②問①のように答えた B さんの意図を教えてください
 問③ 2 コマ目の A さんの気持ちはどのようなだと思いますか

問題Ⅲ：是認に関する質問
 「テストの点」**【教示】**Aさんは、いつもテストは50点以下をとっていましたが、今回は60点をとりました。Bさんはテストでは、いつも90点以上をとっています。この絵をみて、2コマ目でBさんが何と言うか、あなたがBさんだったら何と声をかけるでしょうか。
 問①：空白の吹き出しに、思い浮かぶ言葉を記入して下さい
 問②：問①のように答えた意図を教えてください
 問③：Bさんに声をかけられたAさんの気持ちを推測して下さい

図3. 問題Ⅲテーマ是認:「テストの点数」

表7 問題Ⅲ「是認」:回答1、Bさんの発話の 카테고리分類

カテゴリー		パリエーション Bさんの発話(回答1)	回答数		
肯定的コミュニケーション	共感を示すコミュニケーション	敬意	70	45	6
		称赞		46	
	信頼関係を築くコミュニケーション	やる気を促す	25	18	
		その他	1		
	否定的コミュニケーション	部分的に評価を示すコミュニケーション	興味関心を示す言葉がけ	29	23
指示的な言葉がけ			4		
批判的なコミュニケーション		合理的事実のみ伝える	6	5	
		軽蔑		1	

表8 問題Ⅲ「是認」:回答 2、Bさんの発話の意図の分類

カテゴリー		バリエーション		回答数	
どちらでもない	波風立てない	一番当たり障りのない言葉だから		27	3
	興味・関心	さりげなく、勉強しているか聞いた			8
	同調する	飲んでるので気を悪くさせないように同調する			13
	Bさんの目線で	褒めてほしかったようにみえたから			3
否定的意図	無関心	まあ、人それぞれだ		22	6
	上から目線	自分の話をしてしまっちは、自慢のようだから			8
	批判的	Aさんが余りに哀れだから			8
両方の要素	もっと頑張れ	褒めていれば、もっと勉強するかもしれないから		31	12
	本音はいえない	彼なりに頑張っていると思うので本音はいえない			19
肯定的意図	素直に褒める	いつもより10点多くとれたことは本当にすごいから		20	19
	一緒に喜ぶ	嬉しそうにしてるから、飲んでる気持ちを大切にしたい			1

表7に示された、発話の言葉の意味と、表8に示された、Bさんの発話の意図を比較して、意味と意図のズレを検討し、意味と意図の一致したパターンを表9に示した。

問題Ⅲ「テストの点」では、ポライトネスの理論：「是認の公理」をテーマとしているが、「是認の公理」では、相手への非難を最小限に、称賛を最大限にする配慮が望ましいコミュニケーションのあり方とされているため、ここでは、称賛を中心とする肯定的コミュニケーションが、ポライトネス理論の是認の公理に合うコミュニケーションのパターンとして捉えられる。結果は、表7に示すように、100人中71人が肯定的発話をしているが、表8の発話の意図の分類でみると、肯定的な意図を持つものは100人中20人であった。それぞれのパターンの発話の意味と意図について、発話では称賛していても、その意図は批判しているパターンもあり、多くの人の発話の意味と意図にはズレがあることが分かる。それぞれの発話の意味と意図のズレを検討し、発話の言葉の意味とその意図にズレがないパターンを表9に示す。その結果、心からの称賛を贈る人は100人中19人であった。

表9： 問題Ⅲ 発話と意図の一致パターン

発話		意図		発話と意図が一致したパターン		発話と意図が一致したパターン合計
どちらでもない	1	どちらでもない	27	どちらでもない	1	30/100
否定的	10	否定的	22	否定的	5	
両方の要素	19	両方の要素	31	両方の要素	5	
肯定的	70	肯定的	20	肯定的	19	

また、相手を非難する否定的コミュニケーションをとるパターンは少なく、100人中10人が否定的発話を行うものであったが、否定的な意図を持つパターンは100人中22人であった。否定的コミュニケーションにおいては、否定的意図を持つパターンは、否定的な発話をするパターンの約2倍であったことになる。それに比べて、肯定的コミュニケーションをとるパターンにおいては、その発話は100人中70人と多いが、肯定的な意図があるパターンは100人中20人であり、肯定的なコミュニケーションをとるパターンにおいて、肯定的意図を持つパターンは、肯定的発話をする人の約3分の1ということになる。否定的意図は多くの場合、発話されず、意図と異なる意味の発話を行っていることが示唆される。

つまり、多くのパターンが、問題Ⅱで示した「ポライトネス規則」(Brown & Levinson, 1987)による「相手のフェイスを侵さない、相手を良い気分にするための気遣い」でもあるといえる会話のパターンをとっているといえる。全体で、発話と意図が一致したパターンは100人中30人であり、多くの人が日常のコミュニケーションの会話において、意図をそのまま伝えることは避けて、相手の面子を保ち、相手との関係性を維持する、または相手との距離を保つ会話を行っていることが推察される。この発話と意図のズレをノイズとして捉えると、100人中70人のコミュニケーションのパターンでノイズが生起していたことが示されたといえる。

しかし、ポライトネスの公理によるところの、問題Ⅰにおける望ましいとされる優先すべき相手の利益とは何を意味するのか、また、フェイスを侵さない、相手の気分をよくする会話のパターンとはどのようなものか、という疑問が湧く。それらは双方の関係性や立場、前後の文脈によっても異なってくるものであると考えられる。さらに、相手の過去の経験による認知や、環境、文化などによって、受話者が、その文脈のなかで、相手の発話をどう受け止めたかによっても、異なる反応を生起させ、また、そこから、さらなるノイズが生起する可能性もあると考えられる。

V 総合考察

本研究の結果より、日常的に行われる社会的コミュニケーションにおいて交わされる会話には、発話の言葉が表す意味と、言葉の意味とは異なる意図が含まれることが示唆された。その意味と意図のズレは、意図的に発せられる場合もあるが、多くの場合は無意図の状態が生起し、また無意図のまま応答されている。よって、日常のコミュニケーションには、多くのノイズが含まれているが、それらは無意図、あるいは無自覚のまま交わされているといえる。

本研究において問題作成に当たり参考にしたポライトネスの理論では、全ての人がフェイスといわれる「自分が他人からどのように見られたいかという自己像」を持っていると考えられている。フェイスには他人に自由を邪魔されたくないという消極的フェイスと、他人に良く思われたい・認めて欲しいという積極的フェイスの2種類があり、この基本的欲求としての二つのフェイスを脅かさないように配慮することが、「ポライトネス」であると捉えられ、会話の参加者がお互いのフェイスを侵さないために行なう言語的配慮であるとされている(宇佐美,2008)。社会的関係を維持するためには、何らかの方法で相手のフェイスを脅かす可能性を少しでも和らげることが望ましいとされており、社会的コミュニケーションにおいて生起するノイズには、その働きがあるのではないかと考えられる。以下に3つ

の観点からノイズについて考察を加える。

(1) 日常のコミュニケーションに含まれるノイズの3つのタイプ

コミュニケーションにおけるノイズの1つは、発話と意図のズレであり、そのノイズの多くは互いのフェイスを守る働き「ポライトネス」でもある。このノイズは意図的、あるいは無意図的に生起される。2つ目は、認知の歪みや、文脈の読み違いなどによって無自覚に生起するノイズである。3つ目は「フェイス威嚇行為」である。この3つのパターンをノイズとして捉えると、日常のコミュニケーションには、多様なノイズが含まれていることが考えられる。

(2) ノイズは相互作用プロセスの中で生起し変化する。

社会的コミュニケーションにおけるノイズは、本人と環境、または対人相互作用の中で生起するものである。ノイズは、意図的なものと、無意図的なもの、無自覚なものがあり、それぞれの立場、関係性、文脈によって変化することが考えられる。また、その様に変化するノイズ自体を特定し、それらを取り除こうとするのではなく、本人と環境、あるいは対人相互作用によって構築された関係性に働きかけることでノイズに変化がもたらされるという視点をもつことが必要である。

(3) ノイズは社会的コミュニケーションを円滑にする働きをもつ

社会的コミュニケーションにおけるノイズを含むパターンは、人が日常的に無意識にとっているコミュニケーションパターンであるといえる。ストレートな表現がはばかれる場面や、人間関係の適切な距離を保つために、多くの人が無意識のうちに活用している。それぞれの立場や文脈のなかで、ノイズにどう対処するかによって、コミュニケーションのパターンや、その文脈、流れは変化すると考えられる。また、意図的にノイズを活用することで、文脈や関係性に変化をもたらすことが可能になるといえる。

ASDの特性であり、中核症状とされている「社会的(語用論的)コミュニケーション」の障害について、熊谷(2017)は、ASD児者の多様な特性に配慮した支援や研究のためには、個性特性(インペアメント)ではなく、環境要因との齟齬(ディスアビリティ)として検討されるべきであると指摘している。情報理論におけるノイズは、正確な情報伝達を妨げるものとして扱われてきた。よって、ASDとされる障害をコミュニケーションにおけるノイズの生起と捉えることもできるだろう。しかし、このノイズは「ポライトネス規則」(Brown & Levinson, 1987)に照らしてポジティブに捉え治すと、相手との関係性を維持する言語的配慮であるとも考えられる。今後、ますますASDの有病率は増加すると考えられ(土屋,2009)、異なる価値観、文化をもつASDと定型発達者による共生社会の構築のための視点を持つことが求められている。まずは「社会的(語用論的)コミュニケーション」の多様性を理解し、「お互いに相手の考えていることは分からないのは当たり前」というところからスタートすることが双方のコミュニケーションのあり方を変えていくのではないだろうか。

【引用文献】

- 綾屋紗月(2011). アスペルガー症候群当事者の自己感と当事者研究の可能性 臨床発達心理実践研究, 6, 68 - 74,
- Baron-Cohen,S., Scott,F.J., Allison,C., Williams,J., Bolton,P., Matthews,F.E., & Brayne,C.(2009) . Prevalence of autism-spectrum conditions: Prevalence of autism-spectrum conditions: UK school-based population study. *The British Journal of Psychiatry*, 194(6), 500-509
- Bateson, G. (1972) . *Step to an ecology of mind*. N Y:Brockman Inc.(佐藤良明訳(2000) . 精神の生態学 改訂第2版 新思索社)
- 別府哲(2018). 情動—ユニークなスタイル 発達科学ハンドブック 10 自閉スペクトラムの発達科学 新曜社 日本発達心理学会 pp.47-57
- Brown,P & Levinson,S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press
- 熊谷晋一郎(2017). 自閉スペクトラム症の社会モデル的な支援に向けた情報保障のデザイン : 当事者研究の視点から 保健医療科学, 66 (5), 532-544
- 奥野雅子 (2013). 専門家が用いる合意形成を目的としたコミュニケーションに関する臨床心理学的研究 ナカニシヤ出版
- 千住淳 (2018). 社会脳と自閉症スペクトラム 発達科学ハンドブック 10 自閉スペクトラムの発達科学 新曜社 日本発達心理学会 pp. 36-46
- Shanon.C.E.,&Weaver,W. (1949). *The mathematical theory of communication*. Urbana:The University of Illinois Press. (長谷川淳・井上光洋訳(1969). コミュニケーションの数学的理論—情報理論の基礎 明治図書出版)
- 土屋賢治・松本かおり (2009). 自閉症・自閉症スペクトラム障害の疫学研究の動向 脳と精神の医学 20 (40), 295-299.
- 内海彰(2003). 言外の意味のコミュニケーション : 語用論概説 人工知能学会誌 18(3), 337-345.
- 宇佐美まゆみ (2008). ポライトネス理論研究のフロンティア : ポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論 社会言語科学 11(1), 4-22.
- Watzlawick, P., Bavelas, B. J. & Jackson, D. D. (1967). *Pragmatics of human communication: A study of interactional patterns, pathologies, and paradoxes*. New York : W.W.Norton & Company. (山本和郎(監訳)(1998). 人間コミュニケーションの語用論 —相互作用パターン、病理とパラドックスの研究— 二瓶社)